

ら南西へ約60km、名門私立校も多く、閑静な住宅街として知られるサリー州のゴダルミングという町にあり、19世紀から変わらない緑豊かな丘陵地帯である。古い教会を中心にした街並みを過ぎると、林の中から突然赤煉瓦の高い塔が現れる。

「特に貯水塔にこだわったわけではないんです。3年くらいかけて古くて広い建物を探していたところ、88年にここを見つけたんです。オックスフォード州にあるピクトリアンの元の学校寮も検討しましたが、貯水塔の8角形の広大なスペースを自由に使えるのが魅力で、ここに決めました」

英国では、古い教会や農家などを改造して自宅にする人が多いが、貯水塔まで検討の対象にする人は少なかつたようで、値段もリーズナブルだった。

近代建築の先駆者として近年見直されている、18世紀のフランス

の建築家クロード・ニコラス・ルドーの計画案に「河川管理人の家」や「農地管理人の家」などがある。緑の中にそびえ立つ塔を見てみると、そのアイディアを彷彿とさせる、斬新なユーモアが伝わってくるようだ。

彼女はこの自邸を、設計だけでなく施工管理まで自ら手がけた。91年に引越したときもまだまだ作業現場のままの状態だったという。

完成は94年。建物探しから数えて9年もかけた努力が報われ、サリー州歴史建造物トラスト賞、王立建築家協会デザイン賞などを受賞した。

7歳の息子と2人暮らし。とはいえ、全寮制の私立校に入学しているため、週末以外はたいていひとり。実際



古いものを愛するのに、こんなやり方もある。

Elspeth Beard
エルスプス ビアード 40歳



塔は高さが40m。サリー州で一番高いという建造物だが、どこかユーモラスな印象が漂う。内部は6階建て(のような)造りで、各階に1部屋。下から玄関、子供部屋、主寝室、スタジオ、キッチン、リビングがあり、階段でつながっている。

塔の最上部にあるリビングルームに飾られた貯水塔のオリジナル設計図の前で微笑むビアードさん。19世紀のプラン(図面)は、ダヴィンチの素描のように繊細だ。ここからさらに階段で屋上に出ると、360度広がるパノラマが楽しめる。



ビクトリア時代の貯水塔を自宅に改造する。

ヨーロッパでは、産業革命以降急激に進歩した技術と、それまでの西洋的な美意識とをどのように調和させるかが課題になり、建築家によってさまざまな試みがなされた。とくに英国では、黄金期ともいえるビクトリア時代には産業建築物までもが、今では不可能なほど贅沢で手の込んだものが多く建てられた。女流建築家ビアードさんの住む貯水塔もそのひとつである。

何世代にもわたって存在し続け今では機能はすっかり「前世紀の遺物」になってしまった建物を新しく蘇らせるということが、ヨーロッパでは想像以上に盛んだ。大規模なものでは、ロンドンのテムズ川沿いの巨大な火力発電所をテートギャラリーの新館にするというプロジェクトがある。エルスプスも、そういった古い建物を大胆に再利用する仕事を主に手がけている。歴史的建造物の構造や意義を理解する幅広い教養が要求されるため、新築より難しく、限られた人にしかできないと言われるジャンルだ。

この貯水塔の家は、ロンドンか

に住んでみると、適度な隔絶感があつて仕事にも集中できるし、プライベートが守られる雰囲気がとても気に入っているそうだ。

室内には、ビクトリア調の見事な鉄細工の階段、玄関に鎮座する水位を計る巨大な定規、水を入れるパイプなど本来の用途を感じさせるエレメントと、実家から譲り受けたという17世紀の貴重なアンティーク家具や教会のベンチ、17〜18世紀の木炭画、この貯水塔のオリジナルの設計図などが巧みに配されている。一朝一夕にはできない調和のとれた空間だ。

大学在学中の3年間、バイクで、しかも単独で世界中を走つたのを皮切りに、現在は飛行機免許も所有、アフリカ、アメリカ、オーストラリア大陸を飛び、レーシングカーも運転する。目的にねばり強く進んで楽しむその力は、第2次世界



塔内最上部にあるリビングルーム。トップライトからサンサンと日が差し込み、とても居心地がいい。ただし、6階まで階段で上るため、着いた瞬間は息切れ気味になるそうだ。



大戦中に空軍将校として活躍した「ノブリス・オブリージの典型」という父親譲りのもののような。全人教育を受けた、文武両道のエリート。今ではもうドラマの中だけの話かと思つていた、上流階級の継承がここにある。



精密にプランニングされて造られた部屋。ホテルやレストランの設計を手がけるプロらしく、どの部屋も居心地がよい。ピアードさんは現在、パワーステーションをオフィスや商業施設の複合コンプレックスに改造するプロジェクトを手がけている。左上から、2階にある息子の寝室、主寝室、オフィス兼スタジオ。12畳くらいの各寝室は天井が高く、上部が踊り場のようになっていて、開放的なバスルームが付く。主寝室には、父親の形見であるオランダ製のアンティークの椅子、また18世紀のフランスの画家ブーシェの木炭画、亡くなる直前の写真などが飾られる。上の写真は、バスルームから下方を見た様子。

階段のコーナー。この反対側が主寝室の入り口になっている。各窓辺や階段の壁面はギャラリーのように写真や絵、ちょっとしたオブジェが飾ってある。窓からは、ターナーの絵のような緑の丘陵地帯や古い住宅の風景が広がる。



キッチンには、ろうそくのシャンデリアがしつらえてある。天井は、元々貯水タンクの底の部分だったものを自分で磨いてラッカーをかけて張った。上り下りにはオリジナルのビクトリア様式の階段を使っている。歴史を感じさせる精巧な鉄細工。

